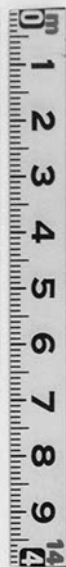


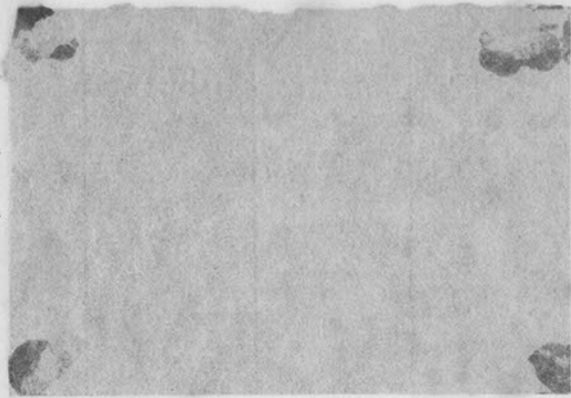
詩 傍 路

六 號



詩 傍 路

號 六



ぬれを聴く

田に水かない  
苗代のはじける音が無気味な  
しづけさ  
百姓は畝をめぐり出した  
頬を突き上げ 腹と背は皺くち  
やに伸び  
乾いた掌が フーンとうなる  
赤い鱗の眼から散る白い涙  
―― だのに苗代は  
苗代はタヤリタヤリと燃え上る

・松本純一・

涼景

―― 森林――

緑色風帯の索源地的な散策

―― 公園――

噴水光線を仰いで女持時許の素足

―― 街路――

色ガラスの星をバラまいて羞耻性  
乾水の露地連歩

・小林直人・

神と人間

……フツツリ  
畜生！  
……

なんといふ恐ろしい叫び声だー  
う  
苦しみの餘り人間が神の胸腹を  
槍で突き抜いたのだ  
あゝなんといふ恐ろしい慄きた  
併し神はどまつてゐた  
そして凄じ眼をして人間  
顔を見詰めてゐたつきり  
はと走る血を両手に押いてゐた  
人間はその凄みの中に  
身をふるはせて死んで了つた

・猪狩ト男・

無題

クンクンクン……クン……  
クンクンクン……クン……

あれは人間の生血を探してゐる  
いらい、尤き蚊の音うちだ

たぢるやうな血を思はせる  
豚っころ

さあ、今日も一日のたかひを  
こころみやうぢやないか

・高橋水聲・

ニッポンオンナ  
・中野勇雄・

あたしは喰べる  
雨垂水の音  
……  
ニッポンオンナとは遊むこと也。  
……

色里に  
ニッポンオンナの花咲いて、  
二本おし、チヨンマがさん

明日はロシヤ、インテリ、カンツイ  
ヤ  
安い約束  
萬で結んだ資本主義

洗滌管の玩具類を  
明けても暮れても夢にゐる  
――夢でなくなる猪肉の嘆――  
雨垂水数へてチヨンマがさん！と

七月

大きな護謨球を各々こんでみた  
と言う胃袋は、数層が裏返しに  
なると聞えてはね上つた

動脈の血液には  
アイスクリームが復活へり

まじろむでゐた気管は  
鵜と語れたホートの權に眼をす  
ました

・長瀬一美・

逢引 他一篇

鬼つかいも氣がつかいながら  
うなじ重く整へつ

したのあたり  
しろつたこくとおかるに

早うちろ  
立寄るは花ふだうつ星  
つかぬことのふくなりたり

庭の一隅に石竹ある、みな  
そりみいて咲きぬ

能度もゆすりきしてて。

みっみおしい土に  
じつとしてろ目  
曲ゆりれる鎌月。

鎌月の

木枕の底に木の芽にほい。

ゆるやかにながれる

・高瀬勝男。

画家と蛙

歪んだ三脚に腰を下したのば  
唾の色盲画家  
これはまたひよろ長いかんほろ  
だ

太陽は赤く淀んで沈み  
病院に黄色い電燈がついた

梅林の莖生からは  
縄。ふらんこにも洋装の女兒も

白鶴車の紳士も漆洲産のジヨン

何時の間にか消え先せ

響を賣いて——続笛

(画家は鬼はあみ声を上巻)

レールに倒れかかる電柱——

(画家はいつさんにも土手を馳  
せ上り)

空をゆする蛙声に  
カンパヌは一色に塗りつゝさる

・石川武夫。

I

百睡も待ち人になれぬ雨蛙だ

II

白色になつたおばあさんが膝を  
枕に昼寝だ  
蛙の上に巻を結へる東を被に

やすやすと  
似かたなきのぼされたやうにも  
見えたら  
腰の辺に着物かぬ開いて  
水たれとこけた肌かみえた  
析  
おきさい  
とおれはひなりだした

つかれたやうだ  
やすらかなやうだ  
まをなれさう起きうれもれない

おれは急うゆうもろかちかりか  
縋いてくる  
縋いてくる  
縋いてくる

まつくろくすのまをやをつて縋ふ  
おれは急うゆうもろかちかりか  
縋いてくる

そして肌地がまっかで  
それから夕雲が空を掩ふてきた

・三野混純・

・編輯偶則・

・清澄しきつた準備を以て臨み  
得た徳達の官能は活潑に家業  
的其物ううちに自分と言ふ  
きもつと勃沸させていけます  
・直入に穿創していります。

「勝田」

・第六輯生誕！

・久し振りに三野氏からいい作  
品をもらへうけこいに感謝  
・本輯は詩から転化した五七五  
・チツと雲を散らす  
・受贈雑誌いっつも下う多情佛心  
のまじりです 純一

×路傍詩六輯

大正十五年七月二十日発行  
福島県石城郡平田町六十二番地  
発行所 路傍詩社  
・無代配布・



